

---

# ハートキャッチガオガイガー

ソダグァ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハートキャッチガイガー

### 【Nコード】

N2359N

### 【作者名】

ゾダグア

### 【あらすじ】

『勇者王ガイガー』と『ハートキャッチプリキュア!』のクロスオーバー。

宇宙飛行士を目指す少年獅子王凱は、ある日妖精マモルと出会った。そしてプリキュアになって悪の組織“ゾンダリアン”と戦う羽目に!?

「ふん。俺の脚を引っ張るなよ……」

敵か？ 味方か？

正体不明のキュアソルダート。

「凱……そんな、女装趣味があつたなんて……」

「違つんだ命！ これには訳があつて」

幼馴染の誤解を乗り越え、戦え！ 凱！

「ジェネシックフォルテウェーブ！ 光になれええっ！！」

凱の勇気が宇宙を救うと信じて。

——以上、嘘あらずでした。本篇は2作品のキャラクターが遭遇し、若干共闘するだけです。

## （前書き）

時期としてはガオガイガー側がEⅠ-02の出現した2005年4月以降かつ、ゴルディーマークが起動する6月より以前。ハトプリ側はつぼみが鎌倉から転向して来て一月は経った頃と設定しています。2つの作品を同一の世界に併存させるに当たり、設定を変えている点がいくつかあります。また、絶賛放映中の作品を使用しているため、後でさらにおかしい面が出てくるかも知れません。書いている途中にキュアサンシャインが登場しましたが、本作品にはサンシャインのSの字すら見当たりません。また、キャラが一部崩壊しています。これらの警告と先程の嘘あらすじの文章を見て問題ないと考えた方。よろしければ本編を読むか一考して下さい。

—— 2005年の首都東京。その地下でうごめく者達が居た。

パイプや訳の分からない部品群が張り巡らされた部屋、その中央にある捻じれた鏡面からヒトの顔の様なものが現れる。

「機界四天王よ、機界昇華のための準備は進んでいるか？」

彼……と言つて良いのだろうか、顔は低い男の様な声を発する。それに応えるように部屋のどこからか声が響いて来た。

「このピツアにお任せ下さればすぐにでも」

壁から鳥の様な姿をした男が、

「ウリイイイイツ！ ペンチノンも出港に問題ありません」

別の個所の壁から選手に一つ眼を付けた船が、

「プリマーダもですわ、パスター様」

そして、床から自動車部品を付けたバレリーナが現れた。

四天王と言うからには、後一人いないと数が合わない。その疑問に答えるかの様に彼らの主人であるのだろう、最初の声の主——  
パスターは3人に尋ねた。

「ポロネズはどこに居る」

「あの人なら、この前見つけた“デザトリアン”とやらの調査に行っておりますわ」

プリマーダが彼の問いに答えた。  
すると、ピッツァが嘲るように言った。

「フッ……、あの不完全なシステムか。我らゾンダリアンの粗悪な真似事など調べてポロネズはどうするつもりなのだ」

「何ですって!？」

ピッツァに喰ってかかるプリマーダ。互いに距離があるために手こそ出ないが、一触即発と言った空気が満ちていた。

「控えよ、2人とも」

見かねたのか、パスダーが重々しく言った。

2人はパスダーに向き直る。パスダーは続けた。

「出来損ないとは言えど、我らと同系統のシステムだ。何か利用できるかもしれない。この件はポロネズに任せ、お前達は別の策を考えておくのだ」

「……はっ!」

3人の姿が部屋から消えた。彼らを見送ると、パスダーも顔の形を崩して元の鏡面に戻った。

## ハートキャッチガオガイガー

——希望ヶ花市。

首都近郊の、よく言えば閑静な、悪く言えば田舎町である。いや、少し前まではそうだったのだが、東京湾上に作られた研究都市——Gアイランドシティとを繋ぐ定期船が開通したおかげで、一躍発展し始めた都市である。

その一角にある商店街に、ファッションショップ「フェアリードロップ」は存在する。

著名なファッションモデルである来海<sup>くるみ</sup>もかの実家と言っただけあつて、並べられている服や小物のセンスも素晴らしく、近辺に住む年頃の少女たちに絶大な知名度を誇っている。

経営者夫妻の次女えりかは、今日も家業の手伝いにいそしんでいた。

「ふう。って、あれ？ あの子、一体どうしたのかな？」

立て続けに対応していた客が途切れ、一息ついた彼女。ふと、店の前で立っている少女に気付いた。少女は時折店の中を覗き込み込んで溜息を吐いている。

「ああ、あの子なら店を開けた頃にはいたみたいだよ。声をかけようとは思っただけど、ちょっと手が離せなくてね……」

えりかの呟きに、たまたま近くの棚に商品を運んできた父の流之助が答えた。

店内に掛けられた時計を見ると、11時12分。軽く一時間以上は待っていることになる。

「お父さん。今のうちにあの子に話聞いて来てもいい？」

「ああ、頼むよ」

父に許可を取ると、店の入り口に向かう。

おしゃれに目覚め始めた少女が、気恥かしくて店に入れないと言う事は意外に多い。えりか自身にはそのような経験はないが、彼女の親友がまさにそんなタイプだった。

こうした層に対するケアがしっかりしていることも、フェアリードロップ人気の理由の一つだった。

「一体どうしたの？」

ドアを開けて話しかけるえりか。いきなり声をかけられたからか、少女は一瞬体を硬直させ、そしてゆっくりと振り向いた。

「あ、驚かせちゃってごめんね。あたしは来海えりかって言って、この店の店員。キミが店の前で長いこと立っているから気になって声かけたんだけど、一体どうしたの？ 緊張して入れないって言うんなら、心配しなくても大丈夫だよ」

「あ、いえ、ちがうんです。私、待ち合わせをしていて……」

少女——初野華<sup>はつのはな</sup>は話し始める。

彼女は男の子——話を聞く限り“恋人”に聞こえるのだが……とにかく男の子を待っているらしい。ところがその子が約束の時間になっても現れないそうだ。決して約束を破るような子ではないのだが、最近トラブルに巻き込まれる事が多いらしく、心配しているとのことだった。

「へー、あの“黒いロボット”の戦いに何度も。そりゃあ災難だっ

たねえ」

そのトラブルと言うのが、4月に都庁前に出現して以来、全国に現れている黒いロボットに関することだと言うのだから驚かされる。と、轟音を立ててナニカが上空を通過していった。

見上げると、ライオンの顔の意匠を胸に戴く白いロボットだ。それらを見た華の表情が変わる。

「あのロボットが来る……」

華の言うとおり、上空を通過していったロボットは黒いロボット出現の予兆だった。

白いロボットは腰から吐きだした緑色の雲の中に3機のメカと共に飛び込んだかと思うと、黒いロボットとなって現れる。そして背中に背負った飛行機の下部より推進剤を噴射し、上空に舞い上がった。えりかは、心配そうな顔の華と共に噴射煙を見送った。

××××

少し時間をさかのぼり、ロボット出現から30分程前の道。初野華の待ち人である天海護は、迷っていた。

「うーん。公園があそこだから、ソロバン塾がこの辺にあるはずなのに見つからない」

現地集合と言う事で、Webサイトから落とした店のアクセスマ

ツプ。しかしそれは、Gアイランドシティの開発の余波を受けて発  
展中の希望ヶ花市においては、少し古い地図であった、

横髪を手ぶらの左手でくしゃくしゃとかき回しながら悩む。

店でまち合わせなんて言わないで、いっしょにくればよかった。  
行路で用事があつたがための現地集合案は、完全に裏目に出てい  
た。

「しかたない。一回公園までもどろっ」

地図に載っている物件の中で、今はつきりと分かっているのは公  
園のみ。もし誰かに尋ねるにしても、人が居る公園の方なら知って  
いる人がいる可能性が高い。

護は先ほどまで歩いてきた道を引き返すことにした。

「ん？」

溜息をついてUターンした彼の視界に入ったのは、公園から駆け  
だす人々の姿。そして植栽の上から覗く巨大な影。

「ゾンダー！？ どうしてこんな近くに……」

ゾンダー。それは地球外知性体——ゾンダリアンが地球の生物を変  
化させ、地球制服の先兵としたものである。理由は不明だが、護は  
彼らの活動が比較的小規模に留まっている内から、その気配を察知  
することができる。こんな目と鼻の先と言っても良い距離に現れる  
まで気づけないのは、初めてだった。

「急いでG G Gに連絡しなくちゃ……」

護はズボンのポケットから金色をした菱形の機械——G G Gポケ

ベルを取り出した。

彼の能力を知った地球防衛組織ガッツィ・ジオイド・ガード——通<sup>ス</sup>称<sup>リイジー</sup>GGGが彼を特別隊員にした際に与えたものである。これを使う事で彼は、いち早くゾンダーが現れたことをGGGに知らせることができるのだ。

「ちょっといいかねお嬢さん」

通報をし終えた護の耳に、低い男の声。

見れば公園から道に出てきた怪物の前に初老の男が立っているではないか。

「は？ アンタ邪魔よ。死になくなかったらそこをおどき」

ゾンダーの上に立つ女性は馬鹿にした顔で男を見下ろしている。護は男に逃げると、声をかけようとした。

「いや、君では無いよ。君が乗っている、そう、“デザトリアン”に聞いているのだ」

汽笛の音が響いた。見れば男の頭に角が生え、そこから煙が出ているでは無いか。

ゾンダーの気配を察知すると緑色に輝く護の髪も、燦然と輝いている。

あの男は、ゾンダリアンだ。

「さあ、君の望みを叶えなさい……」

男は怪物に向けて紫色の球体を近づけた。  
接触。

怪物は女を振り飛ばしてその場をのたうち回ったかと思うと、叫び声を上げた。

『ゾオオオンダアアアッ!』

本当のゾンダーの登場である。

男は片足を引き、後方を見た。護と視線が合う。

男はふつ。と、機械で出来た顔に笑みを浮かべた。

護は生命の危機を感じ取り、駆けだした。

××××

「こちらガイガー。間もなく現場に着く」

G G G機動部隊隊長獅子王凱は司令室——メインオーダールームに告げた。

メカライオン“ギャレオン”とフュージョンしガイガーとなった凱は、現在背中にサポートメカであるガオーマシンの一機、ステルスガオーをドッキングさせて街の上を飛んでいる。

護からの通報以外にも、護の護衛任務中の諜報部員ボルフォッグから送られた映像があったため、速やかに発進作業が行われた結果である。

「あれか!」

護の持つG G Gポケベルから発信されていた電波の最終確認地点。

そこを目標に移動していると、眼下の町で暴れまわる巨大な物体。ゾンダーだ。

「長官、ファイナルフュージョンの許可を。現場は住宅地だ。ディバイディングドライバーが必要だ」

メインオーダールームからはすぐに承認が下りた。

「ガオーマシンッ！」

ステルスガオーを除く2機のマシンを呼び出す。  
まず、大地を割り、先端にドリルを2本備えた戦車——ドリルガオーがゾンダーに襲いかかった。

「てやあああっ！」

ステルスガオーから分離し、凱——ガイガーはゾンダーにドロップキックをお見舞いする。

ライナーガオー、間もなく発射できます。

届いた通信に、すぐに頼む。そう答えて凱は腰のGインパルスドライブを起動させ、再び空に舞い上がった。

「来たか……」

ファイナル…フュージョンッ！！」

叫びと共に、ガイガーの腰からEMトルネードが噴出される。

ファイナルフュージョン

緑色の電磁竜巻がガイガーの周りの空間を侵食、合体を行う領域を展開していく。完全に完成し切る前にガオーマシンが突入してくる。三段飛行甲板空母のミラーカタパルトによって打ち出された最後のガオーマシン——ライナーガオーも無事に突入に成功し、他の

2機と共にガイガーを中心とする周回軌道に入る。

「はあああ……」

ガイガー胸部にあるギャレオンの口蓋部が発光。合体シーケンスに入る。まずガイガーの下半身が180度回転。そしてドリルガオーが機首を上跳ね上げ、ガイガーのつま先を飲みこんだ。続いてガイガーの両腕が付け根から背中に戻り、現れた空洞にライナーガオーが飛び込む。ステルスガオーは先ほどとは違って機首を下に向けた形で落下。ガイガーの腕を覆うように背中に貼りつくと、ギャレオンの頭部を左右で挟む襟飾りを展開する。ライナーガオーの車体下部より出た腕に、ステルスガオーの機体下部に設置されていた2基のエンジンがスライドし、接続。中から手首が現れた。最後にガイガーの頭部に兜が被さり、目に光が灯る。

「ガオツガイッガーッ！」

凱の叫びと共にEMトルネードがかき消えた。  
人類最強のスーパーメカノイド“ガオガイガー”の完成である。

「うおおおおおおおっ！」

凱——ガオガイガーは背部と腰部、そして両腕から推力を噴出させ、飛翔する。

雲海を眼下に見下ろす高度にまで上昇すると、軌道を水平に近いものに変える。

後方より高速で接近する物体を捕捉。それ——ディバイディングドライバーは銀色の表面を剥離させてゆき、若干の落下軌道に入っていく。

「ツール、コネクトツ！」

ガオガイガーはコクピット内に展開された照準を元に、左の拳を  
デイバイディングドライバーに突きこむ。  
接続。

「デイバイディングドライバーッ！」

背部からの推力と位置エネルギーを持つて急速に地面に到達する。  
そしてデイバイディングドライバーの先端のブレード部を地面に突  
き立てた。

瞬間、町が湾曲して円形に切り取られたかと思うと、硬い岩盤が  
現れた。暴れていたゾンダーは突如足下が開けたことにより、落下  
する。これこそデイバイディングドライバーによって生み出された  
戦闘空間——デイバイディングフィールドだ。

「行くぞ、ゾンダー！」

デイバイディングドライバーを左腕から切り離し、ゆつくりとデ  
イバイディングフィールドに着地するガオガイガー。

落下時のダメージから回復したのか、敵が迫って来る。ガオガイガ  
ーは迎え撃つように駆けだした。

××××

「ああ、アンタ達今頃来たの？」

デザトリアンの反応を察知し、公園にやってきた来海えりかと花咲つばみ。だが、そこに居たのは、デザトリアンを生み出す悪の組織砂漠の使徒の幹部が一人、サソリーナのみだった。

「サソリーナ。アンタ、そんなやる気なさげでどうしたの？」

えりかは問わざるを得なかった。なぜなら、視線の先に居るサソリーナは、気だるげに砂場で城を作っていたのだ。

「聞いてよ、酷いんだから。アタシがせっかく作ったデザトリアンと暴れてたらさ、いきなり出てきたオッサン……いや、あれはロボットかしら？ まあ、とにかくソイツに紫色の玉をくつつけられて、あんなのになつて……アタシの言う事全ツ然聞かなくなっちゃったのよぉ〜！」

サソリーナは彼女達の傍まで走って来ると、早口でまくし立ててきた。目元には涙が浮かんでいる。彼女が指さす先には、荒地で黒いロボットと戦う怪物の姿があるではないか。

「その……他の砂漠の使徒の方々にはどうすれば良いのか聞きましたか？ 何か分かるかも知れませんか？」

つばみは敵相手だと言うのに、真剣に意見を述べている。

えりかは彼女のこのように真面目なところは好きだが、「敵相手にもそれはどうよ」などとも思ってしまった。

「それがみんな酷いのよ。脳筋のクモジャキーは頼れないし、コブラー ज्याなんてアイツを見た瞬間『美しくないね。キミでなんとかしたまえ』なんて言うのよ。拳句の果てにサバーク博士も手に負え

ないらしくて……もう、アタシどうしたら良いのよっ!」

頼れない仲間達への怒りを爆発させたのか、サソリーナはその場で地団太を踏みだした。

「あゝ、もう。アタシ達もどうすればいいのよっ!」

「いいのよ、ですっ!」「ですう!」

えりかも叫ばずにはいらなかった。

一緒に居た妖精2体も、一緒に叫んでいた。

××××

「ヘル・アンド・ヘブン!」

ガオガイガーとゾンダーとの戦いは佳境に入っていた。

ガオガイガーは呪文を唱えながら両腕を広げる。掌から攻撃の力、左掌から防御の力があふれ出てくる。

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……」

左右の掌が互いの平の面を向け合う形で重ねられ、握られる。二つの相反する力がより合わされた。

そして両腕からEMトルネードがゾンダーに放たれる。大出力電磁場の暴力的な奔流に、機械の体を持つゾンダーに逃れる術はない!

「はああああああっ！」

握られた両の拳を前方に突き出した状態で、ガオガイガーは背中から推力を吐きだして突貫する。拳は敵の体内に突き刺さった。

「ふんっ！」

突き刺した拳は敵体内のゾンダーコアをゆつくりと、しかし確実に引き出した。

周りの組織を引きちぎり、後ろを向くようにコアを天に高々と差上げると、ゾンダーであったものは爆発した。

炎に包まれた戦場。しかし余韻に浸る間はない。ガオガイガーは両の手で作った皿の上にゾンダーコアを乗せたまま、背中と腰部の水力で飛翔する。

数分後、デイバイディングフィールドが焼失し、町はデイバイディングドライバーの使用前と変わらない状態に戻った。ガオガイガーはゆつくりと推力を絞って着陸する。

「凱兄ちゃん」

ガオガイガーが着陸するや否や、背中に半透明の6枚の翼を持つ、全身緑色に輝く少年が飛んできた。“浄解”と言う、ゾンダーとなった人々を解き放つ姿、通称“浄解モード”となった天海護である。

「おう、護。浄解を頼むぜ」

護はガオガイガーの掌の上に滞空。そして呪文を唱え始めた。

「クーラティオー・テネリタース・セクティオー・サルース…」

護は中指と薬指をまっすぐにし、それ以外の指を曲げている左手をゾンダーコアに向けて、締めくくりとなる呪文を唱えた。

「コクトウーラ！」

柔らかな光が機械と生命の合間に墮とされていた被害者を開放する。そのはずだった。少なくとも今まではそうだった。

「そんな……人間じゃ、ない？」

そこにあったのは、氷雪花のようにその内に花を閉じ込めた水晶であった。

護は恐る恐るそれに近づいて行く。

「護、無闇に近づくな！　ゾンダーの罠かも知れない」

ガオガイガーは注意するが、護は警戒していないようだった。

「きつと大丈夫だよ。これからはわるい感じがしないもん」

そう言っ護は水晶に触れた。

淡い光。

Gストーン程ではないが、水晶は護と接触すると反応した。

護に注意を払っていると、諜報部所属の勇者、ボルフォッグから連絡が入った。

『ガオガイガー、少女……と言っても良いのでしょうか？　正体不明の物体が2体接近しています』

ボルフォッグから教えられた辺りにセンサーを向けると、フリル

が沢山ついた、可愛らしい服装の少女が2人こちらに向かって来ている。

同時に、ボルフォッグが少女と言いきれない点も納得できた。

「俺程じゃないが、かなり早いな……」

少女らは一見すると小学校高学年から中学生位。だが、走る速度は人間のそれを優に超えている。サイボーグである凱に匹敵するほどだ。

敵か、味方か。ゾンダーに関わる者なら護に何らかのリアクションがあっても良いのだが、それが全くない。

逡巡している内に、少女たちはガオガイガーの足下にまで来ていた。そしてあるうことか青い方の少女がガオガイガーの装甲に跳び乗ったではないか。

「な!？」

少女はそれこそ蛙か飛蝗のようにガオガイガーの装甲を跳ね、ついに手の上にやってきた。

護は警戒していないらしく、彼女の下に近寄って行った。

「あなたは？」

護の質問を、少女はタンマ。と言って遮る。そして何かが入った水晶球を取りだすと、先ほどの水晶と接触させた。

強い光が生じたかと思うと、2つの水晶は無く、ガオガイガーの手の上に中学生くらいだろうか？少女が意識を失って倒れていた。

「うわっはぁ！ 石がお姉さんになっちゃった!」

護はえらく感動している。どうも、彼自身、ついこの前そのようになりアクションを取られていた存在であったことを忘れているように見える。

「それじゃね」

護に軽く手を振ると、少女は先ほどと同じルートを使い、今度は跳び降りようとしていた。しかし、護が彼女を止める。

「ところで、あなたは一体……」

少女は一旦その場で止まり、振り返った。そしてこう言う。

「アタシはこころの大樹を守るプリキュアの一人、キュアマリン。それじゃ、」

少女は今度こそ飛び降りた。彼女を追おうとする護を止め、呟く。

「プリキュア。それにこころの大樹……か」

下で待っていた赤い格好の、おそらく彼女もプリキュアなのだろう——と一緒に先程の少女は去って行った。おそらく彼女達の行方は諜報部が探ってくれるはずだ。

「あ、しまった！」

と、護がいきなり大声を上げた。一体どうしたんだと聞く間もなく、彼は飛び立ってしまった。

「待ってくれ、護。勝手に帰っちゃ……」

「ごめん、凱兄ちゃん。華ちゃんをまたせてるんだ！」

護はそういつて公園の木々の中に下りて行つた。  
ガオガイガーは溜息をついた。

×××××

「ただいま〜って、うわ!？」

つばみたちと別れ、帰宅したえりか。店のドアを開けようとしたら、中から男の子が飛び出してきた。なんとかぶつからずにすんだが、尻餅をついてしまう。

「ごめんなさい！ でも、どうしても急がなくちゃいけないです」

どうも男の子は一礼して、走り去っていく。

どこかで見た様な気がする。

尻餅をついたまま気になっていると、店の中からこんどは父が出てくる。

「さっきの子が、ずっと待ってた子……ええっと、」

「華ちゃん？」

「そう。あの子の待ち人だったみたいだよ。さっきのロボット騒ぎに巻き込まれていて遅れたそうだ」

よっこらしょっと、じじ臭い掛け声を出して立ち上がるのに手を

貸した後、父は先ほどの少年のことを話してくれた。

「そっか、あの子が華ちゃんの……」

待っている間の華の心配そうな顔、そして先程の少年の必死な顔を思い出す。

デザトリアンを追って店を出た時に、華も店を辞している。

もう少し待っていれば会えたのかな。

そんなことを考えつつ、えりかは店の扉を開けた。

× × × ×

翌日、凱はガンマシン“ガンドーベル”を駆って、GGG主任研究員である父、獅子王麗雄博士と共にある場所に向かっていた。何でも、昨日の戦闘後に現れた“プリキュア”について深く知る人物らしい。

「よし、ここじゃ」

ガンドーベルを停めたのは、ガラス張りの建物の前。中には植物が生い茂っているので、植物園なのだろう。建物自体は少し古いが、手入れがしっかりとされていて、清潔な印象を与えていた。

「昔、絆とお前を連れて3人でここに来た事があるんじゃないが、覚えるのかの？」

土産を抱えてタンDEMシートからさ降りていた麗雄は聞いてくるが、凱はまるで思い出せない。

「ゴメン、父さん。思い出せないよ」

「そうか……。まだお前は小さかったからのう、覚えているはずもないか。ここはワシの古い友人の植物学者が園長を務めていてな。一回、家族旅行のついでに挨拶に来たんじゃよ。」

「……さあ、行こうか」

「ああ」

ガンダーベルの駐車用スタンドを立てると、扉を開けておいてくれている麗雄に続いて植物園の中に入った。

「おーい、花咲君。おるかのう」

キヨロキヨロと園内を見回しながら目的の人物を探している麗雄に続いて、凱は彼の後をゆつくりと歩きながら、植物を見ていた。外から見て分かるとおり、建物の内部は沢山の種類の植物に溢れていた。だがそのどれも整然と植えられ、手入れがなされていた。素人の凱の目から見ても植物に対する愛情が伺える。

「はいはい。今参りますよ」

奥の方から女性の声が返ってきた。

若干早歩きになる麗雄の後を追って行くと、突き当りに2階に上がる階段が見えた。そしてその上から初老の女性が降りてくる。

「あら、まあ……。お久しぶりですわ、獅子王博士」

「やあ、花咲君。連絡もなしにいきなり押しかけて悪かったね」

女性は麗雄の姿を見ると、嬉しそうに駆け寄ってきた。

古い知り合いと言うことらしいが、もしかすると昔の恋人なのか。凱が邪推していると、麗雄が彼女を紹介する。

「凱、彼女は花咲薫子君。昔、ワシが勉強を教えていた娘じゃよ。花咲君、息子の凱じゃ。一度だけ会ったことがあると思うんじやが、覚えているかの？」

「えっと、お久しぶりです？」

女性——花咲の表情が驚きに満ちる。

まったく覚えていないが、初対面ではないそうなので凱は「はじめまして」とは言わなかった。

「息子さん！？ シャトルの事故で亡くなられたハズじゃ……。  
まさか、幽霊？」

そう言えば、自分は戸籍上死んでいるのだった。

凱はサイボーグに改造された時に聞いたことを思い出す。普段の生活で気にならないことなのだが、2年前の宇宙船の事故の際に戸籍上は死亡扱いにされているのだ。

「ちょっと事情<sup>わけ</sup>ありでな。少し聞きたいことがあるのじやが、都合は良いかね？」

「え、ええ……。こちらにどうぞ」

花咲に案内され、テーブルに着く

その時、凱はどこからか見られている気配を感じた。

「どうしたんじや、凱？」

落ち着かない様子が気になったのか、麗雄が声をかけて来る。

「いや、なんでもないよ。……どうも誰かに見られているような気がしてさ」

「ああ、ここには妖精がいるからのう。花咲君、隠れている子らもお茶に誘ってやってはどうかね？」

「え、ええ……それは良いですわね。」

——シブレ、コフレ、一緒にお茶にしましょう」

花咲が奥の方に声をかけた。そこには凱の背丈をも越える巨大なぬいぐるみしかないのだが、体を覆っている厚そうな毛皮から、小さな生き物が2体飛びだしてきた。

「シブレですう！　こんにちはですう」

「コフレですつ！　こんにちわですつ」

2体はテーブルの前まで飛んできると、宙に浮いたまま挨拶をする。

「はじめまして、獅子王麗雄じゃ。こっちは息子の凱」

「こんにちは」

麗雄はさほど驚いていないようであるが、凱は内心、とても驚いていた。だが、彼はおとぎ話で見る様な羽を生やして飛んでいる護の姿を何度も見ているおかげで、驚きを声に出さずにはすんでいた。

「2人ともよろしくですつ！」

妖精たちはそのまま凱のすぐそばに来る。そして、左腕に抱きつくではないか。

「Gストーンが反応している!？」

妖精たちが接触した瞬間、凱は己の体を維持するGストーンに反応があつたのを感じた。

麗雄と顔を見合わせると、ニヤリと、口の端を上げて笑っている。

「やはり、Gストーンに何らかの関係があるようじゃのう。凱、袖をまくって直接触ってもらいなさい」

「ええと、シプレ、コフレ。ちょっと離れてくれないかな？」

ぼくたちがキライですか？ と、聞いて来る妖精たちの表情に、内心ぐつと来る物を抑えつつ、凱は手首をメトロノームのように振って否定する。

「ごめんよ。ちょっとだから、ちょっと」

長袖の上着の左の袖をめくり上げる。

露出したサイボーグ体の腕に麗雄と凱を除いたその場の面々の表情は凍りつく。

「博士……ついにご自分の息子を実験台にするとは……」

スゴイ、カッコいいと連呼している妖精たちとは違い、花咲は一步退いていた。慌てて事情を、一部隠して凱が説明したので疑いは晴れたものの、麗雄が妖精達に触れようとすると、少し警戒しているようだった。

「キレイですう……」

凱の左腕に埋めこまれているGストーンは、妖精たちに触れられると暖かい、柔らかな光を放ちだした。だがそれは護が触れた時程ではなく、Gストーン同士の“共鳴”に近いものであった。

「シプレ、コフレ。その石はこころの大樹と何か関係があるのかい？」

麗雄が妖精たちに問う。若干間を置いた後、コフレが首を振った。

「ちがう力ですつ。でも、この石にはこころの力、とくに“勇気”にみちあふれているですつ。勇気はプリキュアの力に、とっても近いですつ！」

同じ様に心の力を使う者。だが、そのルーツはまるで違うものだった。異星よりもたらされた力への謎は、結局そのままとなった。

「ありがとう。そうか、やはり違ったか……」

麗雄は少し落胆している様だった。妖精たちは彼の様子を心配そうに伺っている。

「ただいま」

と、植物園の扉を開ける音と共に少女の声が響いた。身近な者らしく、妖精たちはすぐさま声のする方へと向かって行った。

「つばみ、おかえりですう！」

「ただいま、シプレ。おばあちゃんはお奥ですか？」

「はいですつ。今日はガイとレオがきていますつ！」

「ガイとレオ？ ひょっとしてお客さんですか！？ 2人とも、急

いで隠れて……あ、いや、もう見られて……ああ！ どうしよう！  
？」

大きな葉で隠れてしまっただけに見えるが、入口の方から聞こえる声は  
大変慌てているようだ。

「彼女が君の……？」

麗雄が訊ねると、花咲は溜息を吐いて言った。

「ええ、孫のつぼみです。」

——つぼみ、今日来てらっしゃる方達はプリキュアについて知  
っている方ですから、大丈夫。シプレ達といらっしゃい」

酷く慌てた声と共に、中学生位だろうか。少女が妖精たちと共に  
現れた。

「ほら、つぼみ。ご挨拶なさい」

「は、はい。あの……花咲つぼみです！」

少女——つぼみは、傍から見ていて可哀想に思えるほど動揺して  
いた。そして、こんなことを言い放った。

「もしかして、あなたがたもプリキュアですか！？」

場の空気が凍る。きつと、凱と麗雄がフリルの沢山付いた服を着  
た姿を想像したのだろう。

命が着たらきつと可愛いだろっな。

凱は今この場に居ない恋人に脳内でプリキュアの衣装を着せ、一  
瞬現実逃避していた。

「いや、ワシらは違うよ。君のおばあさんの……古い知り合いじゃ。昔……その、キュアフラワールの戦いに何度か巻き込まれたことがあって、それ以来の知り合いなんだよ」

「あ、そうだったんですか。よかった……、男性がプリキュアの衣装を着た所なんて見たくないですもんね」

苦笑しながら否定する麗雄に、つぼみは安心したようだった。それから何か話そうとしたが、妖精たちが割り込んだ。

「デザトリアンが現れたですっ！」

瞬間、つぼみの表情が変わった。先ほどとは打って変わって真剣なものになり、花咲の方を向く。

「おばあちゃん。えりかと合流して、デザトリアンの所にいきます」

「気を付けてね」

「はい！」

それから彼女は凱たちにも一礼し、妖精たちと共に出口に向けて駆け出した。

「父さん、俺もつぼみちゃん達と一緒に現場に向かいます。」

花咲さん、失礼します」

昨日の様な事が起きるかも知れない。

凱はつぼみの後を追うことを告げ、植物園から出て行った。

× × × ×

時は再びさかのぼり、場所は希望ヶ丘にある波止場そこでは天海護と初野華はちょうどGアイランドシティとの定期船から降り、休憩所にあるベンチで休んでいるところだった。

「華ちゃん、大丈夫」

護は自販機で買ったお茶の缶を持って、華の下に行く。少し船酔いした華は休憩所に設けられたベンチに横になっていたが、護が来ると起き上がって缶を受け取る。

「だ、大丈夫だよ。だって……今日は護くんを選んでもらった服を買ったもん！」

彼女はお茶を口にし、軽くガツポーズを取る。まだ顔色は良くない。

やはり近場にすれば良かったのかもしれない。護は船の中で苦しそうにしている華を思い返してそう思った。

「あ、ちょっといいこと思いついた」

と、護が暗い顔をしていると華はいたずらをする前の幼児の様な顔をして護に飲みかけのお茶の缶を渡す。そして

「えい！」

護の腿に頭を乗せてベンチの上に横になった。俗に言う、『膝枕』  
と言うヤツである。

周りに居た人たちの視線が彼らに集まり、護の顔は羞恥で真っ赤  
に染まる。

「は、華ちゃん！　こんな人前じゃはずかしいよ……」  
「ご、ごめんね。すぐおき……え？」

護の言う事を聞いて現在の状況を思い出したのか、華はいそいで  
起き上がろうとする。だが、護にそのまま抑えられてしまった。

「でも、もう少し調子が良くなつてからね」

何をやっているんだ、僕は！

護は思わずそう叫びそうだった。波止場に居る人たちは彼らを見  
てクスクスと笑ったり、歯ぎしりをしたり、中には手にしていた塩  
味のポテトチップの袋をラッパ喰いする者もいる。

「ガキども。こんな所でなあにを、ストロベリっているんじゃない？」

と、上から声が聞こえる。声のする方を見上げると、電灯の上に  
一人の男が立っているではないか。

乱れた赤い長髪に白いロングコート。それにブーツ。ひと昔前の  
少女漫画に出ていてもおかしくない格好だ。その話し方さえ何とか  
すれば、だが。

「おおおお。横になっている方、見えるぜよ、弱っているお前  
のこころの花がよう」

完璧なおかしい人だ。

華を抱き起こしてゆつくりと距離を取る。すると、男は両の掌をすり合わせ、広げて叫んだ。

「お前のこころの花、頂くぜよ！」

「きゃあああああ！」

護は弾き飛ばされる。そして華は光に包まれ、そこには昨日見たのと同じような水晶があった。

こうなると辺りに居た人間もおかしいと感じたのか、その場から逃げだす者も出てくる。男は人込みを悠然と飛び越え、水晶の下にやってきた。そして華の入った水晶の下部にっていた球を指先で押し、落とす。

「GGGに連絡しないと……あれ、ないぞ？」

GGGに連絡しようと。GGGポケベルをポケットから出そうとした護。しかし、左右どちらのポケットにもそれはない。

「デザトリアンの。お出ましぜよ！」

叫んだ男の方を見る。見れば、彼の片方の手には護の探し物があった。

水晶とGGGポケベルが接触。するとまた鋭い光が奔り、そこには金色のひし形をした怪物が居た。

こうなると、周りにいた人々は我先にと逃げ出した。護は昨日の事を思い出し、球状の水晶をなんとか拾い上げた。

「は、華ちゃん！？」

その中には、膝を抱えるような態勢で眠る初野華が居た。

「ねえ、聞こえてる？ 起きて、返事して！」

護は水晶の中の華に呼びかける。だが、まるで返事がない。

「暴れるぜよ、デザトリアン！」

男のあいまいな命令に従い、怪物——デザトリアンの腕が床に張られた木を模した構造材を打ち砕いた。多くの破片が宙を飛んで行く。

「危ない、護隊員！」

その内のいくらかが護を襲うところであった。だが、それらは現れたパトローラーによって全て遮られる。

G G G 諜報部所属ボルフォッグである。

「ボルフォッグ！！」

「大丈夫ですか、護隊員？」

ビークルモードと言う事で表情は見えないが、穏やかな口調で話しかけてきたボルフォッグに、護は安堵の息を漏らす。

「私のアレを取り押さえます。その間に浄解をお願いします。

——システムチェンジ！」

ロボット形態に変形したボルフォッグはデザトリアンの前に立ち塞がった。体格差にしておよそ3倍。ボルフォッグはデザトリアンを容易に地面に倒した。

『——！ッ！』

デザトリアンは縛めいまとからのがれようと必死に体をよじる。いくら勇者ロボの中では小型のボルフォッグでも、GSライドから生み出されるパワーはデザトリアンのそれと比べ物にならなかった。

『怖くない、怖くない……』

と、デザトリアンから、護の耳になじみのある言葉が紡がれた。昔にした護との約束。それを守るために護が教え、そして華の口癖となった言葉であった。

「護隊員、お願いします」

一瞬呆けてしまったが、ボルフォッグに呼びかけられて護は気を引き締めた。

まって、華ちゃん。すぐに助ける。

護は浄解モードと呼んでいる姿に変わると、ふわり、と浮き上がってデザトリアンの前に降り立った。

「クーラティオー・テネリタース・セクティオー・サルース…」

呪文を唱えつつ、中指と薬指をまっすぐにし、それ以外の指を曲げている左手をデザトリアンに向ける。

「コクトウーラー！」

ゾンダリアンの呪縛から幾多の人々を救ってきた力が発動する。暖かな光がデザトリアンを包みこんだ。だが……

「そんな……効かない!?」

護の前には、相変わらずデザトリアンが横たわっていた。

呆然とする護。おもわず浄解モードが解けてしまう。

するとデザトリアンはますますもがいて護の方に腕を伸ばしながら言葉を発する。

『まもるくんはあのくろいロボットがでてくるといなくなっちゃう。どこかでなにかあぶないめにあってないか、しんぱいだよ!』

こもりさんたちは「うわきしているんじゃないか」といつてくるけど、そんなことはぜったいにない。でも、なにをやっているかもおしえてくれないから、しんぱいだよ!』

デザトリアンの瞳……と思しき部分の淵には涙が溜まっている。

自分を思う華の気持ちに、護は心の内に熱いものを感じた。

「ここからは私達に任せて下さい!」

後ろから声がかかった。

見れば中学生位の少女が2人。

それとぬいぐるみ……なのだろうか? 目鼻に口が付いたマスコット状のモノをこれまた一体ずつ傍らの空中に連れて、立っていた。その内片方、長髪の少女には見覚えがある。昨日フェアリードロップで護とぶつかった少女だ。

「プリキュア、オープン・マイ・ハート!!」

「プリキュアの種、いくです!!」

少女達が出した香水瓶状の物体から現れた赤と青の光は、ぬいぐるみだか生き物だか分からないマスコットの首に付けられたブロー

ちに吸い込まれ、代わりにコイン状の物体を出現させた。それから  
は赤と青の花吹雪が彼女らの姿を遮って見えない。

ようやく花吹雪が収まって視界が開けると、そこに居たのは……。

「大地に咲く一輪の花——キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花——キュアマリン！」

「ハートキャッチプリキュア——！」

昨日ガオガイガーの掌の上で見た少女——キュアマリン。彼女  
と同様の意匠を持つ赤い衣装の少女——キュアブロッサムだった。

「クモジャキー！ また性懲りもなくこんなことをして！」

「それはこちらのセリフぜよ。毎度毎度邪魔をしに追ってからに……  
プリキュア、今日こそお前たちを倒すき！」

——デザトリアン！ とつとそのロボットを振り解いてプリキ  
ュアと戦うぜよ」

男——クモジャキーの命令を受けるまでもなく、ボルフォッグの  
拘束から逃げようとデザトリアンはもがき続けていた。だが乾燥重  
量11.5トンを誇るボルフォッグの重量は、勇者ロボの中では軽  
量とは言えど持ち上げることなど出来なかった。

「ええい！ 元が弱虫のガキだけあって、弱すぎるぜよ。お前は『  
こわくない』などと強がり言うだけのヘタレじゃき！」

クモジャキーは容赦なくデザトリアンを罵倒する。

プリキュアが彼に対して何か——おそらく反論をしようとしてい  
たが、護はその前に言葉を叩きつけた。

「華ちゃんは、弱虫なんかじゃない！」

浄解モードになって華とクモジャキーの間の空中に立ち塞がる。背後から息を呑む音が聞こえたがしたが、無視して護は続ける。

「華ちゃんは確かに怖がりだよ。でも、『怖い』って気持ちを乗り越える勇気を持っているんだ。だから、弱虫なんかじゃない！」

クモジャキーは一瞬、あつけにとられたような表情をしていた。しかし次の瞬間、凶暴な笑みを浮かべて殴りかかって来たではないか。

「なら、俺と言う恐怖を乗り越えて、同じ事をまた言ってみるぜよ！」

避けようと思ったが、後ろではボルフォッグがデザトリアンを取り押さえている。

今よけたら華ちゃんとボルフォッグに当たる。

護はそう考え、クモジャキーの攻撃を受け止めようと、両の腕を斜めに交差させた。

「護、後は俺に任せる！」

が、攻撃が届く前に、横から飛び出してきた影がクモジャキーを蹴り飛ばした。彼は地面に転がったが、すぐさま跳ね起きて乱入者に向き直る。

「貴様……一体何者ぜよ」

同じく着地した影にクモジャキーは問うた。  
乱入者は答えない。代わりに回答したのは、護だった。

「凱兄ちゃん！」

いつものサイボーグアーマーではなく私服を着ていた凱は、左の袖をめくってGストーンを露出させる。輝くGの文字を映すGストーンを向け、凱はクモジャキーに言い放った。

「誰にだって『怖い』と思うことがある。だが、それを乗り越える勇気だってみんなが持っているんだ。勇気を馬鹿にした貴様を……俺は絶対に許さない！」

凱とクモジャキーの戦闘が始まる。その間に護は再び華の下に舞い降りた。今度は、浄解モードを自らの意思で解き、ずっと傍。伸ばされた手、その指を両手で包み込んだ。

もがいていたデザトリアンの動きが、止まった。

護はプリキュアの方に顔だけ向け、言った。

「プリキュア、華ちゃんを助けるのを手伝って！」

プリキュアは親指を立ててウインクを返してくる。

次にボルフォッグを見る。

「ボルフォッグ。華ちゃんを離してあげて」

「いけません、護隊員。もしもまた暴れ出したら……」

ボルフォッグは承服しかねているようであった。だが1分程護とデザトリアンを見つめて、ゆっくりと立ち上がって距離を取った。

「花よ煌めけ！ マリインタクト！」

「花よ輝け！ ブロッサムタクト！」

プリキュア達は杖を呼び出し、ブロッサムと共に音楽記号のフォル

テッシモをかたどった青と桃色のエネルギーを展開。

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア・フローラルパワー・フォルテッシモー！」

そしてエネルギーを身に纏い、デザトリアンに突撃してくる。  
まぶしい。

一瞬目をつぶってしまったが、すぐに開く。

「ハート……キャッチ！」

デザトリアンを突き抜けたプリキュア達は振り向く。そしてタクトの鎧に当たる部分を回転させ始める。開いた花弁をもしたエネルギーがデザトリアンの背後に現れ、ゆっくりと上昇。

護は再び浄解モードとなり、デザトリアンの指をずっと持っていた。

弛緩した指は重い。その重みがやがて消え……

××××

「気をつけてね！」

護と華が会計を済ませる頃には、空には夕日が出かかっていた。  
フェアリードロップの前で彼らを見送ると、えりかは溜息をついた。

「どうしたんですかえりか？」

ちようどやってきたつぼみが寄って来る。

えりかは軽く手を上げて彼女の方に近づいた。

「つぼみ。凱さんは？」

「先ほどお父様と共に帰られました。護くんと華ちゃんは——あ、今帰られたんですね」

「うん。連絡船の乗り場が壊れちゃったから、護君のお父さんが仕事の帰りに迎えに来てくれるんだってさ」

それから黙って、紙袋の取っ手を片方ずつ持って笑い合う少女と少女の背を見送る。伸びる影も見えなくなると、えりかはかねてからの疑問を口にした。

「護くんのあの力。一体何なんだろうね？　凱さん達は護くんと知り合いらしいけど、何か知ってるって？」

「いえ。今回おばあちゃんに会いにきたのも、こころの大樹が解明する手がかりになるかも知れないからだったそうですよ。——でも」

「でも？」

「わからなくっても、いいじゃないですか」

いつもならえりかはとことん謎を追うのだが、今日はつぼみの言う通りだと思った。

『華ちゃんのこころのはな——青いアスターの花言葉は「私はあなたを信じているが、しんぱいだ」です』

こころのはなを戻した時につぼみに聞いた、華のこころのはなの花言葉。それは護の正体がなんであれ、信じて待つものだ。他人である自分たちが詮索すべき事柄ではない。

「そうだね。」

——あゝあ。どこかに、あんな風にアタシを心配してくれる男の子がいないかな」

終わり。

## （後書き）

私のバカネタ3作目。少年向けアニメと少女向けアニメと言う驚異のコラボレーションですが、書き上がったことに自分自身驚いています。執筆途中にいつきがサンシャインに変身し「怖いと思う気持ちを取り越えるのが“勇気”」と言ってくれなければ、きっとこの作品はハードディスクの容量を圧迫する黒歴史の一部となっていたことでしょう。

——自分語りが長くなってしまいました。皆さん、A4にして30ページに及ぶかと言う分量に書かれた、年齢の割に稚拙な文章を読んでいただきありがとうございます。また機会がありましたら、プリキュアや勇者とは限りませんが書かれるであろう私の別の作品を読んでいただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2359n/>

---

ハートキャッチガオガイガー

2010年10月10日21時25分発行